高専における学生生活の支援のあり方についての一考察
──低学年における人間形成のための授業導入──

緒 方　優

A Study of the Method of the Student Life Support in the College of Technology
Introduction of the Lecture for the Personality Forming of The Students at the Latter Stage of Their Secondary Education

Masaru　OGATA

(Received October 2, 2006)

Abstract Because of the popularization of higher education, various students have begun to enter universities and colleges of technology. Our school (MNCT) is no exception. The quality of incoming students has changed dramatically in the past few years. As students of the college of technology, the new generation of the students often lack basic academic skills, social manners, self-respect, mental stability, and personal relations or consciousness. The number of the students with these problems seems to be increasing every year.

The purpose of this study is to seek an ideal way to support students with various problems. First, we analyzed the questionnaire survey conducted for MNCT students by the Office of Student Counseling for the past four years. The survey consists of the following topics: common worries of all students, the different ways students cope with personal anxieties, the level of satisfaction with school life, causes of personal anxieties, and student's mental health. Second, we compared the result of the survey with the related parts of the class evaluation questionnaire survey conducted by the Department of School Affairs Guidance every year.

In the end we found common issues relating to students' mental growth, personal relations, and emotional problems between the aforementioned two surveys. As a result, we need to argue the importance of introducing a new system to support students' human growth as young adults; that is, we need to create lectures for mental health and social manners for students.

1　研究の動機とねらい

ここ数年、本校においても多様な学生が入学して来るようになった。それらの学生の質の変化は教職員の間でも認識されつつある。このような学生には往々にして、授業の受講心得、基礎学力、日常生活のマナー、自尊心、対人関係のあり方等が欠如しているように思われる。これらの原因には初等・中等教育段階で基本的な社会性や人間性が育成されていないこと、あるいは発達障害等が考えられる。
卑近な例をあげれば、授業における受講心得欠如による教員とのトラブルがある。このような例は年々増加傾向にあり、低学年（１～３年）のクラス担任や教科担当教員のみならず学生にも精神的なストレスとして蓄積され、一部では問題化しているところもある。

最近、学生相談は大学教育の一環であるとの立場を取る大学もふえつつある [1, 2, 3]。問題発生の予防という立場から人間教育の講義が用意されている国立や私立の大学が出てきている。例えば、新入生や低学年生に対する援助として、授業の受講心得、大学生のマナー、心の健康、サークル活動、人付き合い、ハラスメントなど様々な講義内容が用意され、彼らの大学生活への適応を促している [1, 3]。また、高専においても多様な学生の入学に対する対策を取りはじめている学校も出てきている [4]。本研究では、

平成 14 年度から４年間実施した学生アンケート調査と教務指導部が毎年作成している授業評価アンケート報告書 [5] の関連部分を分析し、これからの学生指導のあり方、とりわけ、新入生や低学年生への人間形成教育のあり方を考察することを目的とした。

2　アンケート調査とその分析

2.1　はじめに

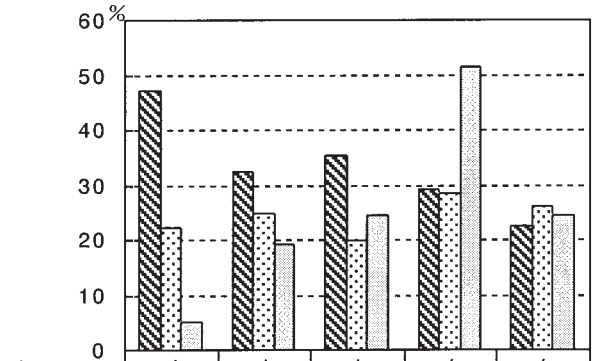
学生相談室は、平成 14 年度から毎年、学生生活で生じやすい問題を未然に防ぐため、後期開始の 10 月（平成 14 年度は９月）にアンケート調査を実施し、その都度、分析結果を教育会議や保護者懇談会に報告し、本校の学生支援に役立てもらっている。

2.2　調査方法について

主な調査項目は「悩みの調査」、「悩みの解決方法」、「クラブ活動状況」、「友人の数」、「学校生活の満足度」で、平成 16 年度から「身体や心の状態」、平成 17 年度は「学校評価」を調査項目に加えた。本調査の対象者数は、平成 14 年度は各学年からの無作為抽出による 195 名、平成 15 年度～平成 17 年度は１、２年の全員と３年～５年の各学年からの無作為抽出による 240 名であった。調査した学生総数は 1710 人で、回収率は 99%、性別では男性が 77%、女性が 23%であった。なお、分析はクロス集計表による独立性の検定（5%）により行った。

2.3　学生の悩みと学年別比較について

全学年で悩みごとがあると回答した学生は 68%おり、悩みはないと回答した学生は 20%、分らないと回答した学生は 12%であった。これらの比率は年度間に有意差は認められなかった。



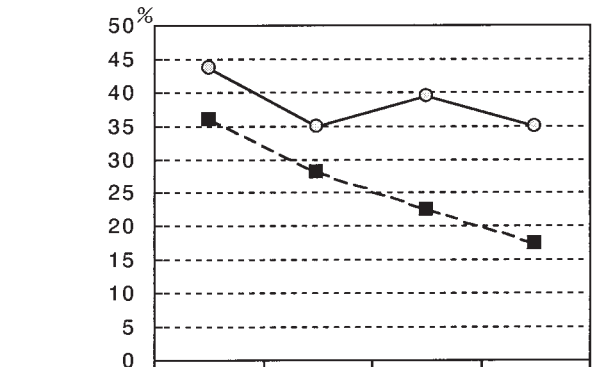
悩みは	1年	2年	3年	4年	5年
勉強の事	47%	32%	35%	29%	23%
交友関係	22%	25%	20%	29%	26%
就職の事	5 %	19%	25%	52%	25%

図1　　悩み事の学年別比較

平成 14 年度から平成 17 年度における学生の「悩み」の上位３つは「勉強のこと」、「交友関係」、それに「就職こと」であった。以下、「進学のこと」、「家庭のこと」、「いじめのこと」の順であった。図 1 は４年間を総合した「悩み」の上位３つの学年別比較である。低学年生（1 年～3 年）において、悩みの第１番目は「勉強のこと」、第 2 番目は「交友関係」、第 3 番目は「就職のこと」で、高学年生（４年～５年）では第１番目が「就職のこと」、第 2 番目が「交友関係のこと」、第３番目が「勉強のこと」であった。悩みを全体的にみると「勉強のこと」が 37%、「交友関係のこと」が 26%、「就職のこと」が 21%であった。

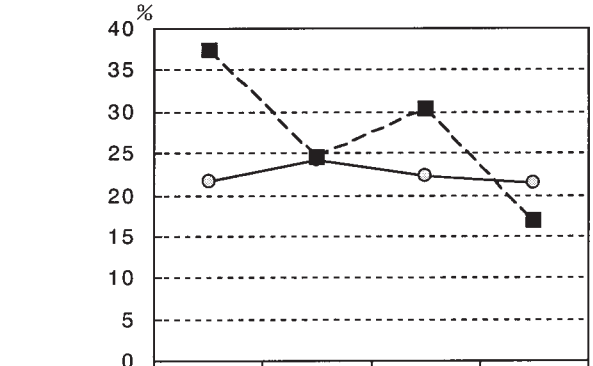
2.4　低学年・高学年別悩みの比較

ここでは、３つの悩み（「勉強のこと」、「交友関係」そして「就職のこと」）について低学年生と高学年生の特徴を分析する。まず「勉強のこと」について、低学年生は高学年生より悩みが大きく、年度ごとの変動幅が小さい、高学年生では年々その悩み



	H14	H15	H16	H17
低学年	44%	35%	40%	35%
高学年	36%	28%	23%	18%

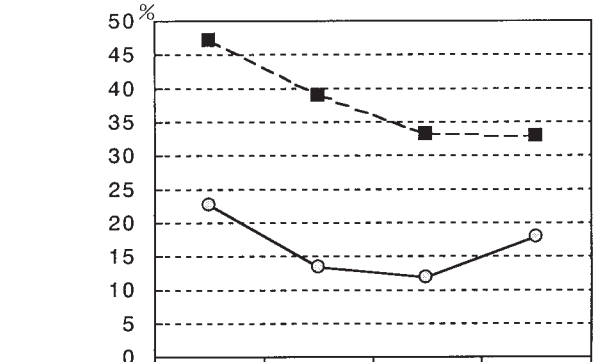
図2　勉強の悩み



	H14	H15	H16	H17
低学年	22%	24%	22%	21%
高学年	38%	25%	30%	17%

図3　　交友関係の悩み

は減少傾向にあることが分った（図２）。次に、「就職のこと」と「交友関係」についての悩みは高学年が低学年より大きく、高専の学生生活を特徴づけていると思われる（図３、４）。

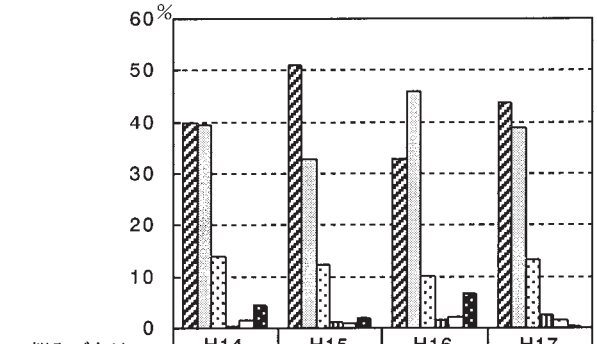


	H14	H15	H16	H17
低学年	23％	13％	12％	18％
高学年	47％	39％	33％	33％

図4　就職の悩み

3　低学年生と高学年生の悩み解決法の比較

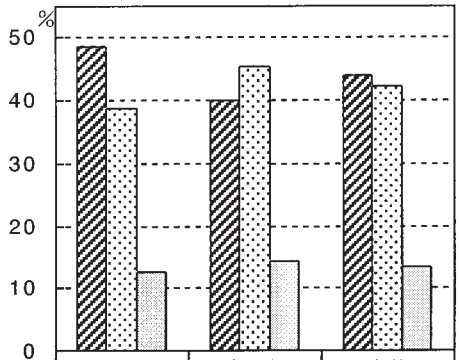
全学生の悩み解決法の年度別比較では、平成 16 年度に他年度との違いが認められたが、担任や他の教員および学生相談室への相談件数はいずれの年度においても極端に少なかった（図５）。



悩みごとは	H14	H15	H16	H17
自分で解決する	40％	51％	33％	44％
友人に相談	39％	33％	46％	39％
親兄弟に相談	14％	12％	10％	13％
担任に相談	0％	1％	2％	2％
他教員に相談	2％	1％	2％	2％
学生相談室等	4％	2％	7％	0％

図5　悩みごと解決法の年度別比較

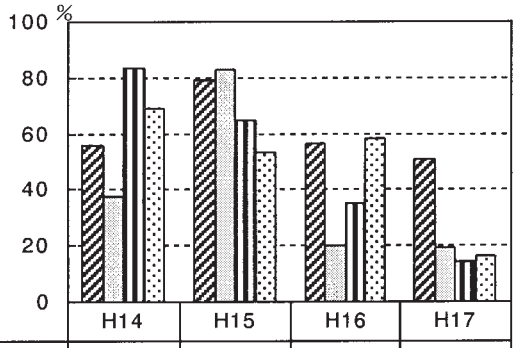
悩みの解決法について４年間を総合して分析した結果、第１番目が自分で解決する（44％）、第２番目が友人に相談する（42％）、第３番目が家族に相談する（14％）であった（図 6）。それらを低学年生と高学年生に分け分析したところ、悩みの解決法に有意差が認められた。つまり、低学年生では「自分で解決する」が第１番目で、学年別では１年が 52％、２年が 48％、３年が 46％の順であった。第２番目が「友人に相談する」で、学年別では３年が 49％、２年が 46％、１年が 39％であった。



悩みごとは	低学年	高学年	全体
自分で解決する	49％	40％	44％
友人に相談	39％	46％	42％
親、兄弟に相談	13％	14％	14％

図6　悩みごとの解決法

高学年生では、第１番目が「友人に相談する」で 46％、第 2 番目が「自分で解決する」で 40％であった。また、悩みの解消法には性差が認められ、男性は「自分で解決する」と回答した学生が多く、女性は「友人への相談」と回答した学生が多かった。さらに、男子学生と女子学生の悩みの解決法について分析すると、低学年生の場合、勉強の悩みについて「自分で解決する」と回答した学生は男子学生の方が女子学生より多かった（図 7）。



	H14	H15	H16	H17
低学年男子	56％	79％	57％	51％
低学年女子	38％	83％	20％	20％
高学年男子	84％	65％	36％	15％
高学年女子	69％	54％	59％	17％

図7　勉強の悩み事は自分で解決すると回答した割合

同じ悩みの解決法として「友人や親兄弟に相談する」と回答したのは女子学生の方が男子学生より多かった（図 8、9）。第 2 番目の「交友関係の悩み」の解決法も「自分で解決する」と回答した低学年生

は、男子学生の方が女子学生より多かった。「友人や親兄弟に相談する」と回答した学生は全学年とも女子学生の方が男子学生より多かった。

「就職の悩み」については、低学年生では男子学生の方が女子学生より「自分で解決する」と回答した割合が高かったが、高学年生では男女間で解決法に有意差は認められなかった。

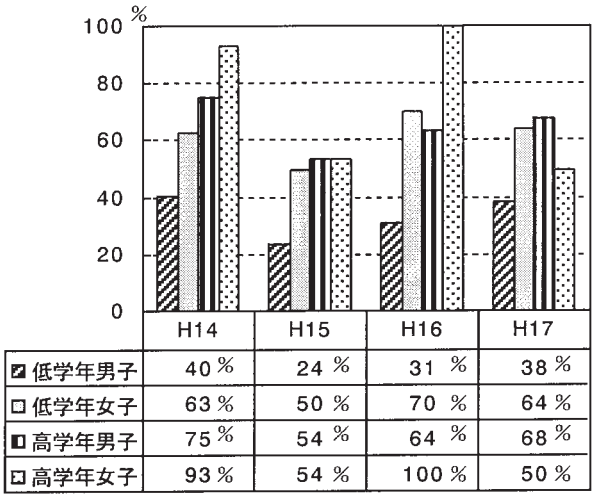


図8　勉強の悩み事は友人に相談すると回答した割合

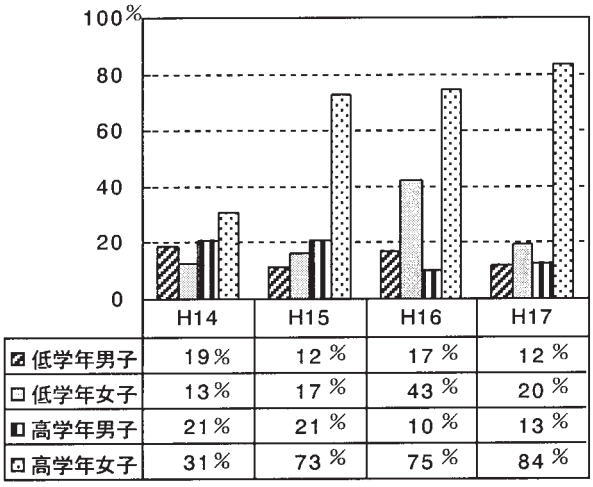


図9　勉強の悩みは親兄弟に相談すると回答した割合

4　学校生活について

図 10 は平成 16 年度～平成 17 年度を総合した学生の悩みと学校生活の満足度のクロス表である。これらの間には有意な関連はなく、また、年度別の各学年の学校生活満足度にも有意な関連が認められなかった。平成 15 年度の調査では、学校生活の満足度の回答項目を「楽しい」、「普通」、「楽しく無い」の 3 択で行ったため、平成 16 年度および平成 17 年度と年度間比較は難しいがおおよその比較は可能と思われる。平成 15 年度の 3 年生では「学校生活が楽しい」が 27%、「普通」が 59%、「楽しく無い」が 14%であった。　これらの学生の 1 年後、つまり平成 16 年度の 4 年生では「学校生活が充実している」が 10%、「普通」が 50%、「あまりやる気がない」が 30%、「全然やる気がない」が 10%と落ち込んでいた（図 11）。同様に平成 17 年度の 4 年生も前年度より落ち込んでいた（図 11）。

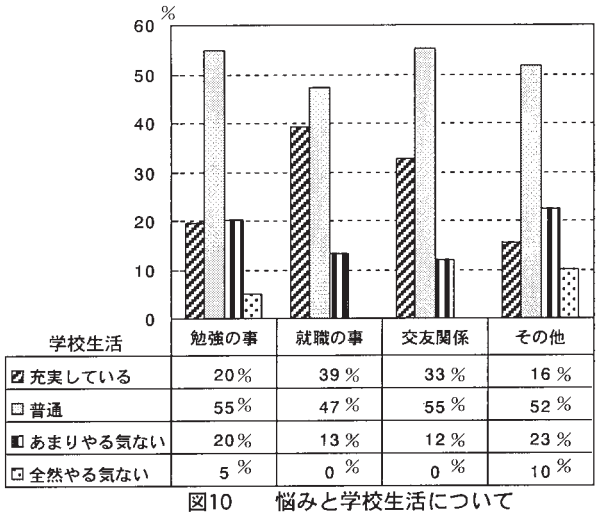


図10　悩みと学校生活について

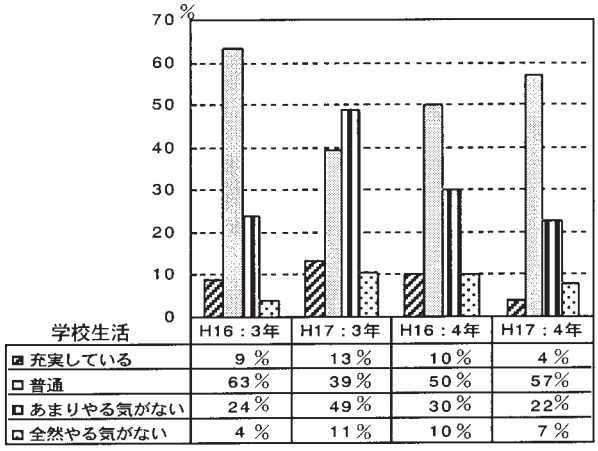
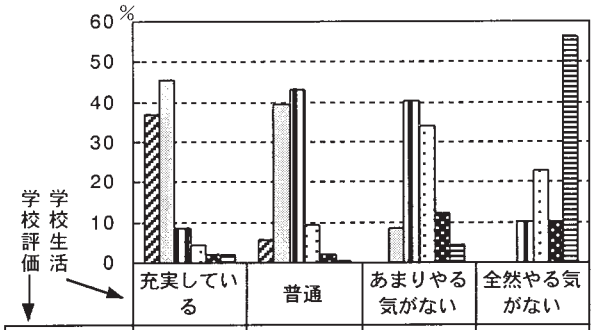


図11　H16年度～H17年度 3 年、4 年の学校生活の比較

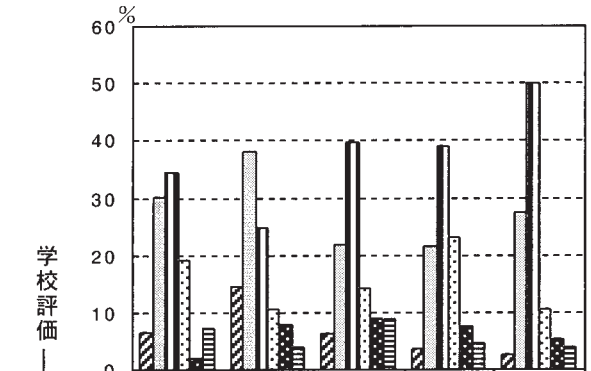
次に、学校生活の満足度と学生の学校評価の間には有意な関連が認められた。とくに、「やる気」がない、つまり学校生活に充実感のない学生は、退学志向が強いようである（図 12）。平成 17 年度は退学したいと回答した学生 30 人中、低学年生が 22 人おり、その内、19 人が交友関係、勉強のこと、就職等進路を主な理由としていた。また、各学年の学校評価にも違いがあるようである。中でも、1 年生、3 年生、4 年生に不満度が高く、4、5 年生では十分満足しいると回答した学生は期待度数の半分以下であった。また、退学志向の強い学生は 1 年生と 3 年生に多く期待度数を大幅に越えていた（図 13）。全体的には約 30%の学生が学校に不満を持

っていたことが分かった。このことは、平成 15 年度ごろから学校が変革期に入り、平成 16 年度に学生指導の面で大きな問題が発生したこととも関連があるのかもしれない。



学校評価 ＼ 学校生活	充実している	普通	あまりやる気がない	全然やる気がない
十分満足	37 %	6 %	0 %	0 %
大体満足	46 %	39 %	9 %	0 %
普通	9 %	43 %	40%	10 %
不満	4 %	9 %	34%	23 %
非常に不満	2 %	2 %	12%	10 %
退学したい	2 %	0 %	5 %	56 %

図12　H17年度：学校生活と学校評価



学校評価	1年	2年	3年	4年	5年
十分満足	7 %	14 %	6 %	4 %	3 %
大体満足	30 %	38 %	22%	21%	28 %
普通	35 %	25 %	40%	39%	50 %
不満	19 %	11 %	14%	23%	11 %
非常に不満	2 %	8 %	9 %	7 %	5 %
退学したい	7 %	4 %	9 %	5 %	4 %

図13　H17年度 学年別学校評価

5　平成 14 年度～平成 17 年度の低学年生の退学状況

平成 14 年度～平成 17 年度の 4 年間で合計 63 人が退学した。その中で低学年生が 54 人であった（表1）。特に、3 年生での進路変更が多く、低学年全体の 63%を占めていた。基本的な原因は怠学による学力不足によるものであるが、メンタルヘルスや家庭環境上の問題や本校への適性によるものも数例あった。大方は 1、2 年生段階での学校生活における年齢に応じた人間形成（精神的・社会的・肉体的など）と関係があると考えられる。平成 17 年度は学校を退学したいくらい不満を持っていると回答した学生の中に 1 年生が 12 人いた。その理由に 5 人が「勉強のこと」、7 人が「交友関係」を上げていた。2 年生は 1 人、理由は「その他」で、3 年生は 7 人で、その理由に 2 人が「勉強のこと」、5 人が「交友関係」等を上げていた。

表1　低学年生の退学者の推移

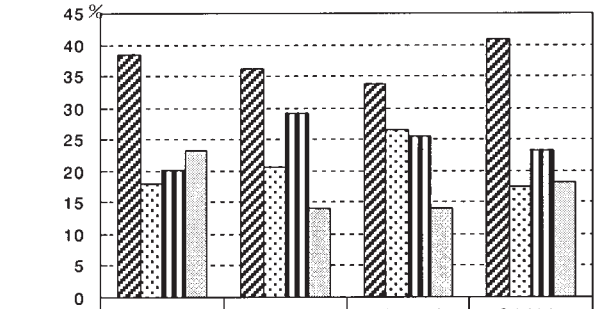
学年	H14年	H15年	H16年	H17年
1年生	4人	0人	0人	1人
2年生	4人	3人	1人	7人
3年生	4人	16人	6人	8人

6　友人の数について

平成 15 年度～平成 17 年度における学生の友人の数は、年度や学年との間に有意な関連はなく、3 年間を総合すると、友人が「1 人もいない」学生は 8 %、「1 人～3 人」の学生は 52%、「4 人～5 人」の学生は 22%、「6 人以上の友人」のいる学生は 18%であった。

6.1　友人の数と学生の悩みについて

各年度（平成 15 年～平成 17 年）とも学生の友人の数と学生の悩み(「勉強のこと」、「交友関係」、「就職のこと」など)の間に有意な関連は認められなかった。



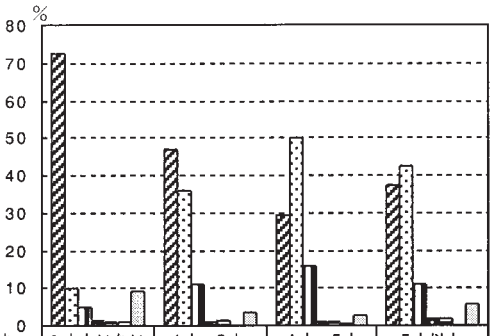
悩みは ＼	1人もいない	1人～3人	4人～5人	6人以上
勉強の事	38 %	36 %	34 %	41 %
就職の事	18 %	21 %	27 %	18 %
交友関係	20 %	29 %	26 %	23 %
その他	23 %	14 %	14 %	18 %

図14　友人の数と学生の悩みについて

6.2　友人の数と悩みごとの解消法について

友人の数と学生の悩み（「勉強のこと」、「交友関係」、「就職のこと」など）解決法の間には各年度（平成 15 年度～平成 17 年度）とも有意な関連が認められた。「1 人も友人のいない」学生は、自分で悩

みを解決する割合が高く、親兄弟に相談する割合は低い、相談室の利用はさらに低かった。一方、「1人以上、友人のいる」学生は、悩みを友人や親兄弟に相談している割合が高いことが分かった(図15)。

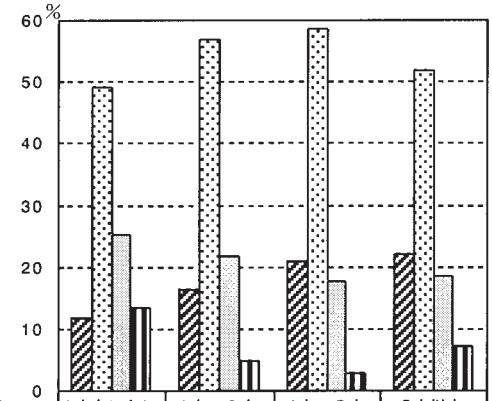


悩みごとは	1人もいない	1人～3人	4人～5人	5人以上
自分で解決する	73 %	47 %	30%	37 %
友人に相談	10 %	36 %	50%	43 %
親兄弟に相談	5 %	11 %	16%	11 %
担任に相談	1 %	1 %	1 %	2 %
他の教員に相談	1 %	1 %	1 %	2 %
学生相談室	1 %	0 %	0 %	0 %
その他	9 %	3 %	3 %	6 %

図15　友人の数と悩みの解決法について

6.3　友人の数と学校生活の関係

各年度（平成 15 年度~平成 17 年度）とも友人の数と学校生活の満足度の間には有意な関連が認められた。つまり、友人の数は学校生活に影響を与えており、友人の多い学生は、学校生活への充実度が高く、友人の1人もいない学生のそれより約2倍高かった。逆に、友人の1人もいない学生で「全然やる気がない」と回答した割合は、友人の多い学生の約2倍高かった（図16)。

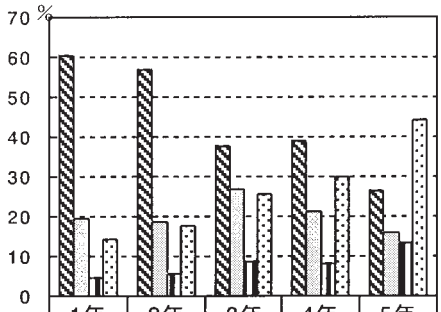


学校生活	1人もいない	1人～3人	4人～5人	5人以上
充実している	12 %	16 %	21 %	22 %
普通	49 %	57 %	59 %	52 %
あまりやる気ない	25 %	22 %	18 %	18 %
全然やる気ない	13 %	5 %	3 %	7 %

図16　友人の数と学校生活について

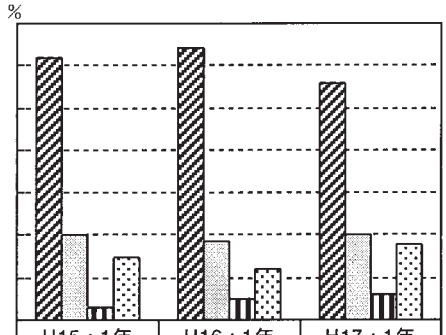
7　クラブ活動について

学年が進行するに伴い、クラブ活動をする学生が減少傾向にあることが分かった（図 17)。図 18 は 1 年生の 3 年間のクラブ活動の推移である。他の学年ほどではないが1年生もクラブ活動をする学生が減少傾向にあるようである。また、学校生活の満足度とクラブ活動の間には有意な関連が認められ



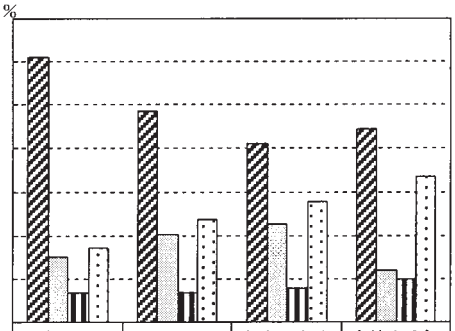
クラブ活動	1年	2年	3年	4年	5年
一生懸命である	61 %	57 %	38 %	39 %	26 %
気が向いたら	19 %	19 %	27 %	21 %	16 %
現在やっていない	5 %	6 %	9 %	8 %	13 %
入部していない	15 %	18 %	25 %	30 %	44 %

図17　H15年度～H17年度：学年別クラブ活動状況



クラブ活動	H15：1年	H16：1年	H17：1年
一生懸命である	62 %	64 %	56 %
気が向いたら	20 %	19 %	20 %
現在、休部状態	3 %	5 %	6 %
入部していない	15 %	12 %	18 %

図18　1年生のクラブ活動の推移



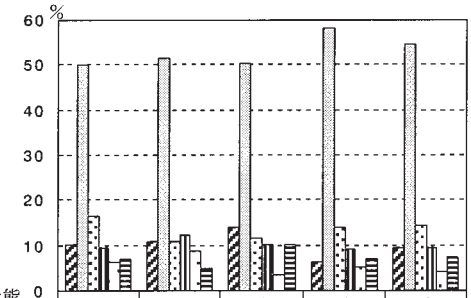
クラブ活動 ↓ ＼ 学校生活 →	充実している	普通	あまりやる気ない	全然やる気がない
一生懸命である	61 %	49 %	41 %	45 %
気が向いたら	15 %	20 %	23 %	12 %
現在、休部状態	7 %	7 %	8 %	10 %
入部していない	17 %	24 %	28 %	34 %

図19　学校生活とクラブ活動について

た。つまり、学校生活が充実している学生はクラブ活動を行っている割合が高く、逆に、やる気のない学生はクラブ活動も活発でないようである(図 19)。それから、友人の数とクラブ活動の間には有意な関連が認められなかったが、友人の少ない学生はクラブ活動に積極性がないような傾向を読み取ることができた。

8　心の状態について

平成 16 年度から調査を始めた「心の状態」について、学生の選択率が増えている回答選択肢は「イライラする」である。とくに、1年生は、その回答選択肢を平成16年度に16%、平成17年度には18%が選んでいた。「人目が気になる」を選択した学生は全体的に約5%、「爽快である」を選択した学生は約10%であった。図 20 は平成 16 年度と平成 17 年度を総合したグラフである。



最近の心の状態	1年	2年	3年	4年	5年
爽快である	10 %	11%	14 %	6 %	9 %
普通	50 %	51%	50 %	58 %	55 %
イライラする	17 %	11%	12 %	14 %	15 %
少し気になることがある	9 %	13%	10 %	9 %	9 %
人目が気になる	6 %	9 %	3 %	5 %	4 %
その他	7 %	5 %	10 %	7 %	7 %

図20　心の状態

8.1　イライラの原因の学年別比較

全学生のイライラの原因を、平成 16 年度と平成 17 年度を総合して分析したところ、その原因の第1番目は「交友関係」、第2番目は「勉強のこと」、第3番目は「就職のこと」、第4番目は「家庭のこと」、第5番目は「進学のこと」であることが分った。学年別では、高学年生の場合は、第1番目「交友関係」、第2番目「就職のこと」、第3番目「勉強のこと」の順であった。低学年生の場合、とくに、1年生については第1番目「勉強のこと」、第2番目「交友関係」、第3番目「家庭のこと」の順であった。また、1年生では、平成 16 年度と平成 17 年度はイライラの原因が変化しており、平成 16 年度はその原因の 48%が「家庭問題」と「交友関係」であった。そして、それは「勉強のこと」を 12 ポイント上回っていた。平成 17 年度は逆に、「勉強のこと」が 49%で、「家庭問題」と「交友関係」を合わせた 24%の 2 倍になっていた（図 21、22)。さらに、特徴的なことは1年生（平成 16 年度と平成 17 年度を総合）で、イライラの原因の1つが勉強の悩みであるとしていた学生は半数近くおり、他の学年と異なった様相を呈していた（図 23)。

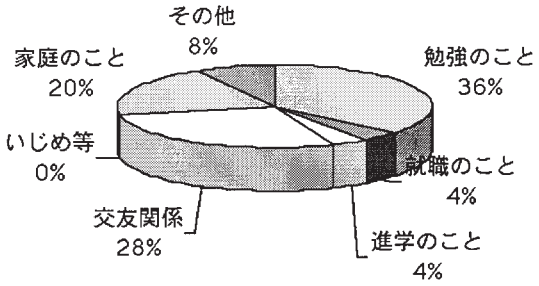


図21　H16年度　1年生：イライラの原因

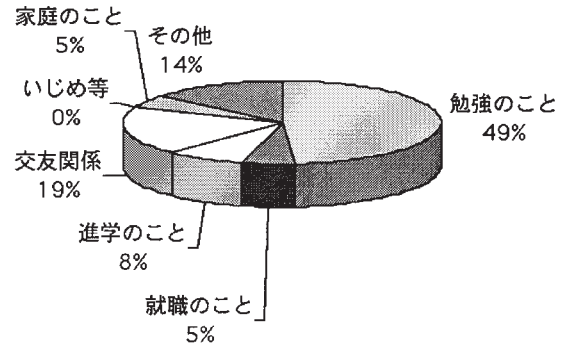


図22　H17年度　1年生：イライラの原因

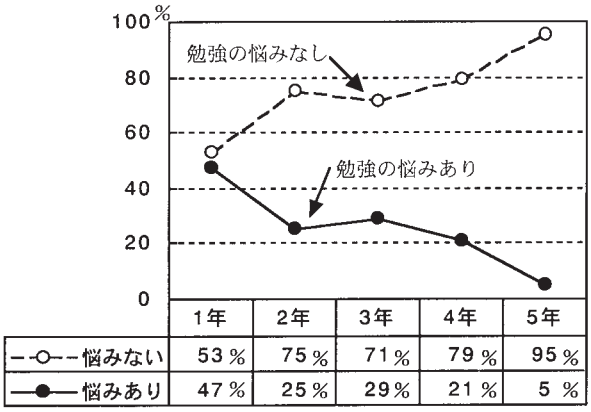


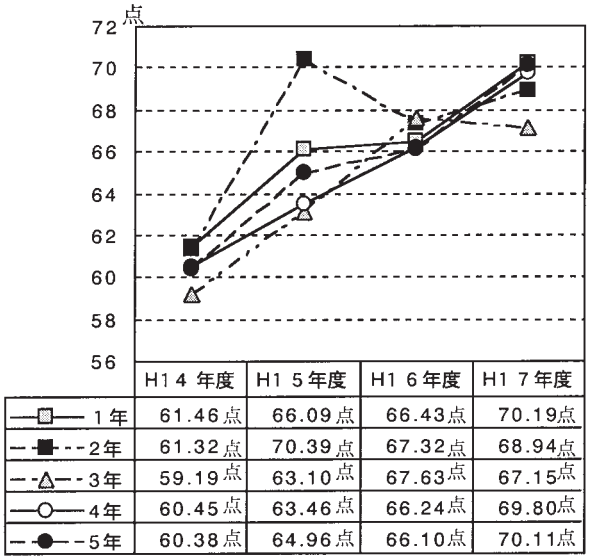
図23 イライラの原因の1つが勉強の悩みである学生

9　学生による授業評価と学生の授業への取り組み

勉強の悩みとの関わりを調べるため、平成 14 年度から平成 17 年度の学生による授業評価アンケート報告書の中から以下の5項目と、授業評価アンケート調査と同時に行われた学生の授業への取り組み

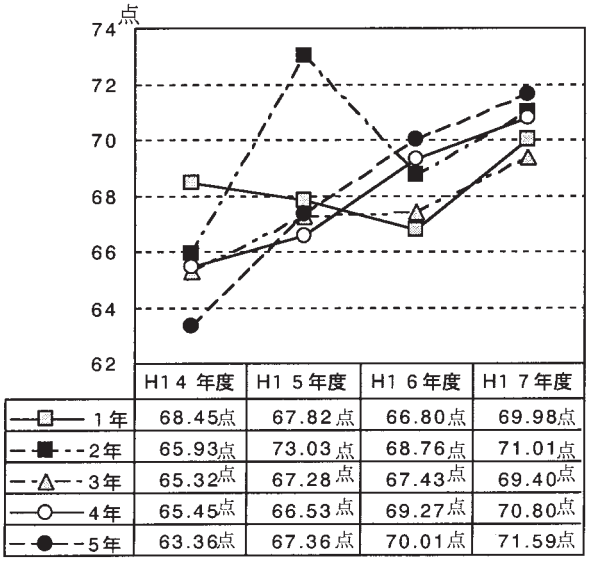
アンケート調査（1 年生の部（4 年間））の分析を行った。その際、アンケート回答選択肢の評点は 5 段階評価で評点の高いものが悪い評価となっていたので、これを y=−20x+120（x：5 段階評点）により 100 点法に変換し、高い評価は高い得点で分析できるようにした。この分析は各項目の変動をグラフ化したものを著者が視覚的にとらえ分析したもので、本研究の目的が蓄積された対象者のデータをもとに今後の学生支援に役立つ示唆を得ることであると考え、統計的に有意差を示す変化が現れなくても何らかの変化や可能性を捉えて分析した。

平成 14 年度以降、「授業に対する教員の説明力や意欲度」は年々向上し、理解しやすくなってきたと評価している（図 24、27）。これは、授業内容への興味と関連しており、「授業内容への興味」も増加していることが分かった（図 25）。



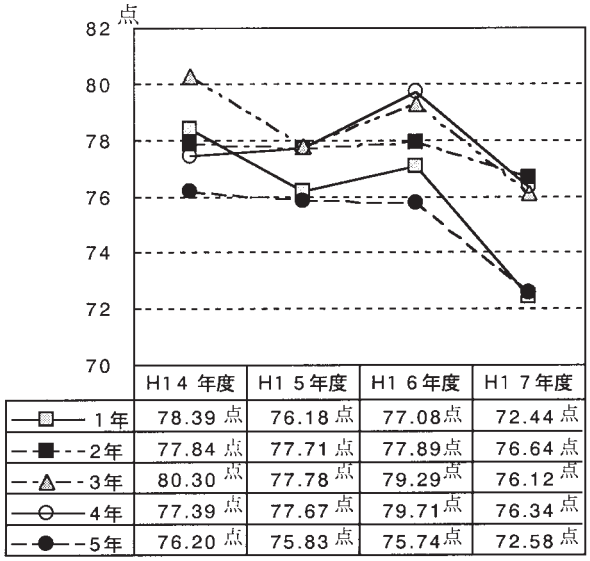
	H14 年度	H15 年度	H16 年度	H17 年度
1年	61.46点	66.09点	66.43点	70.19点
2年	61.32点	70.39点	67.32点	68.94点
3年	59.19点	63.10点	67.63点	67.15点
4年	60.45点	63.46点	66.24点	69.80点
5年	60.38点	64.96点	66.10点	70.11点

図24　授業説明の平易度の推移



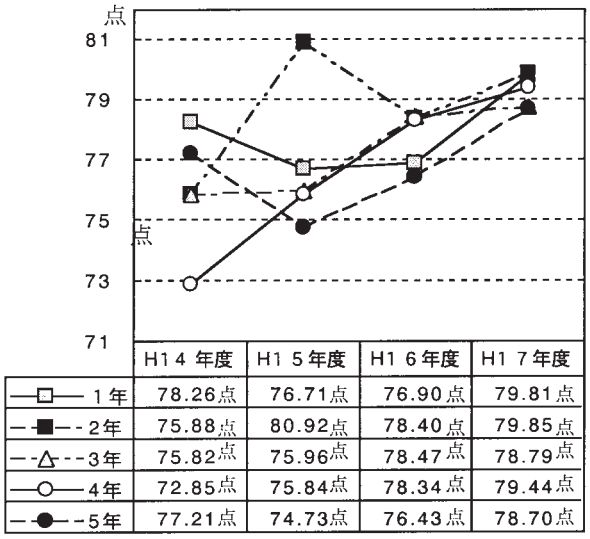
	H14 年度	H15 年度	H16 年度	H17 年度
1年	68.45点	67.82点	66.80点	69.98点
2年	65.93点	73.03点	68.76点	71.01点
3年	65.32点	67.28点	67.43点	69.40点
4年	65.45点	66.53点	69.27点	70.80点
5年	63.36点	67.36点	70.01点	71.59点

図25　授業内容への興味度の推移



	H14 年度	H15 年度	H16 年度	H17 年度
1年	78.39点	76.18点	77.08点	72.44点
2年	77.84点	77.71点	77.89点	76.64点
3年	80.30点	77.78点	79.29点	76.12点
4年	77.39点	77.67点	79.71点	76.34点
5年	76.20点	75.83点	75.74点	72.58点

図26　授業内容難易度の推移



	H14 年度	H15 年度	H16 年度	H17 年度
1年	78.26点	76.71点	76.90点	79.81点
2年	75.88点	80.92点	78.40点	79.85点
3年	75.82点	75.96点	78.47点	78.79点
4年	72.85点	75.84点	78.34点	79.44点
5年	77.21点	74.73点	76.43点	78.70点

図27　教員の授業意欲度の推移

そして、「授業内容の難易度」は平成 14 年度を最高に、平成 15 年度から難易度は下降し、平成 16 年度に上昇するが平成 17 年度は再び下降に転じた。時系列傾向を移動平均法で捉えると難度は減少傾向にあることが分かった（図 26）。同様に、試験問題の難度評価も平成 16 年度には 3 年生を除いて試験問題の難易度評価は上昇、とくに 1 年生は最高に達した。しかし、平成 17 年度には全体的に、非増加か減少傾向を示した。この場合も時系列傾向を移動平均法で捉えると難易度が減少傾向にあることが分かった（図 28）。

次に、1 年生の授業への取り組みは図 29 の通りで、全科目平均して週平均の宅習時間が 30 分未満、予習・復習はあまりしない、そして復習している学生は年々減少傾向にあることが分った。4 年間を平

均すると、宅習時間は 30 分未満（36.33 点）で、半数ぐらいの学生が予習を全然していない（33.14 点）、そして復習についてもあまりしていない（40.24 点）状態であった。

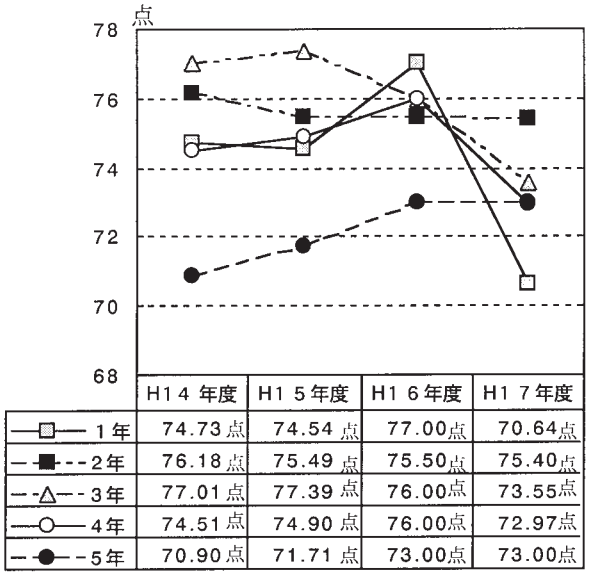


図28　試験問題難易度の推移

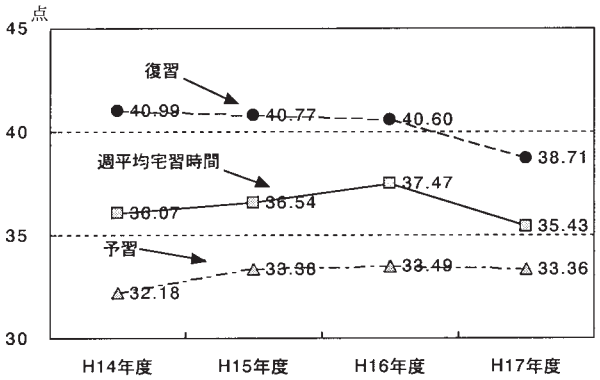


図29　1年生の授業への取り組みの推移（各100点満点）

10　考察

4年間の学生相談室アンケートと授業評価アンケート報告書の分析結果から、いくつかの重要な知見が得られた。

1）低学年生の勉強への悩み（悩みの第1番目）はJABEE 導入に伴う成績評価の合格点の切り上げ、つまり合格点が 50 点から 60 点への変更と関係があると考えられる。基礎数学補習対象者（1年生）への勉強の悩みに対する聞き取り調査（平成 16 年度～平成 17 年度）からも、同様の回答（学生たちは高校の約 2 倍の合格ラインを相当高いハードルとして捉えていること）を得ている。また、学生による授業評価で試験問題の難易度評価は減少傾向を示し適切な問題に近づいているが、依然として難しい段階にあると捉えており、とくに、1年生はそれが勉強の悩みや不安につながっていると考えられる。悩みの第2番目は対人関係である。友人は競争相手であり、ちょっとした感情の対立が大きな悩みを生み出す。クラブ活動が沈滞化傾向にあるのは対人関係の煩わしさに起因しているところもある。そして、学生はこのような悩みの解決法を学生自身で模索したり、あるいは、友人や家族に相談している割合が高いことが分かった。一方で、これらの要因解決に学生相談室を含め担任や教員が関わっている割合が低いということも分った。

2）本研究では、低学年の退学者数と勉強の悩みとの有意な関連性は指摘できないが、それらは関連する傾向があると考えられる。授業評価アンケート報告書を分析する限り、授業環境は年々改善されており、これから学生の勉強の悩みを読み取ることは難しい。しかし、授業内容の難易度（図 26）と試験問題難易度（図 28）については共に減少傾向にあるが、全体的には、「やや難しい」段階にある。とくに、平成 16 年度の難易度の変動と「学校生活と低学年生の勉強の悩み」（第 4 章）とは少なからず関連があるように思われる。また、基礎数学補習対象学生の聞き取り調査と学生の授業への取り組みアンケート調査を合わせて分析すると、基礎学力の不足や授業を理解しようとする努力(すなわち、予習・復習、宿題への取り組み（図 29）など）の不足等でこの先どうしてよいか分からないことへの心の苛立ちが見えてくる。

3）悩みを勉学上の問題としてだけ捉えるとメンタルヘルスの問題を見落とす危険がある。聞き取り対象の低学年生が異口同音に答えた「なんとなく不安である」という言葉は低学年生の心境を代弁しているように思われる。また、学生と言う名称に伴う早い段階での大人扱いには低学年生の戸惑いが感じられた。

こうした状況を改善するには、従来のように入学当初から学生を「自律的行動のできる学生」として処遇するのではなく、ゆっくり時間をかけて大人になるように「支え育てていく」という教育が必要であると考える。例えば、入学時に学生生活に必要な情報を一度に多く与えるのではなく、時期に応じた情報を少しずつ提供することも必要であると考える。この観点に立つと新入生ガイダンスや合宿研修の改善やそれらを補完する授業等が必要になってくる。ただ、このような授業スタイルの提案は、シラバスはどうするのか、成績評価はどうするのか、と言った問題が起こり現在の高専教育に馴染まない、この

ようなことは家庭や自分で解決すべきことである、あるいは学生相談室で個別に行うべきであるといった意見や、従来通り新入生ガイダンスや合宿研修、特別教育活動で行うべきものであるといった意見もあるかと思われる。しかし、5 年もの間、学生相談室にかかわり、学生生活や学生相談の変化を目の当たりに見聞した経験から、低学年生段階での学生生活のあり方についての支援授業は、これからの学校運営上必要欠くべからざるものと考える。その 1 つの方法として人間形成教育という立場から特別教育活動をカウンセラー等学外講師も含めたオムニバス講義に変更するなど大胆な改革を実施すべきであると考える。このような教育手段の導入は、学生の抱える精神衛生上の諸問題や発達障害等などを早期に発見し高専生活で生じやすい問題（学業からの離脱等）を未然に防ぐ方策や学生の社会性（品格・人間的成長)を涵養する方策等を提供すると確信する。九州大学等では新入生や低学年の学生を対象とした人格形成、自己理解に関わる人間教育等の講義がすでに開講されている。そのことにより学生生活で生じやすい問題を未然に防ぎ、人間的成長や発達を促す効果がでているとの報告がある [1、2、3)]。本校では新入生の授業態度（マナー）等を巡る教職員とのトラブルがここ毎年のように発生している。高専でも大学のような人間教育のための新しい講義が開講される必要性を感じている。

謝辞

この研究を行うに当たり、本校教員森茂龍一教授、学生係森岡みどり看護師、古賀晴子教務係主任および川畑亜希子事務補佐員から貴重なご助言や資料提供・整理等のご協力を頂いたことに感謝の意を表します。

参考文献

1)森田裕司・岡本貞雄：新入生対象の講義「キャンパスライフ実践論」の試み,学生相談研究,26,(3),pp.185－197,2006
2)吉良安之：大学教育における新しい学生相談像の形成に関する研究,平成 9 年度文部省科学研究費補助金基盤研究成果報告書,1998
3)斉藤憲司：学生相談の専門性を定置する視点―理念研究の概観と４つの大学における経験から―、学生相談研究, 20,(1),pp. 1 －22,1999
4)松崎俊明・三島利紀：発達障害の理解と支援,論文集「高専教育」,29,pp.481－486,2006. 3
5)都城工業高等専門学校「平成 14 年度授業評価アンケート報告書」～「平成 17 年度授業評価アンケート報告書」